

令和4年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和5年3月17日

札幌市立ひがしなえぼ幼稚園

1 今年度の重点目標

誰もが主役 “一人一人の輝き” が尊重される幼稚園

2 本年度の経営方針

- ・丁寧な幼児理解と評価・実践
- ・幼児期にふさわしい生活の展開と創造
- ・開かれた幼稚園の推進

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
子どもの育ち	子どもたちは安心して過ごし、いきいきと園生活を送っている。	A	家庭と連携し園生活への安心感や期待感をもてるようにしてきたことで、いきいきと過ごす幼児が多い。園全体で幼児理解を深め、個々の自信を基盤に、自分らしさが発揮される保育に努める。	A	A
	子どもたちは興味をもったことに主体的に取り組み、遊びを通した経験や学びを重ねている。	A	子どもの主体性を尊重しながら、興味・関心に応じた遊びや生活を構成し、満足感や達成感を保障してきた。学びの土台となる資質・能力を育むため、指導、援助と環境の在り方について実践研究を通して探り続けていく。	A	A
	子どもたちは、友達や先生と触れ合い対話することを通して大切にされていると感じ、身近な人との関りを楽しんでいる。	A	友達や教師と安心して対話を重ねるなかで人への信頼感の基盤を作り、多様な関わりを積み重ねてきた。教職員が温かい関りや対話のモデルとなり、幼児が自分が大切にされていると感じられる学級、園づくりを目指す。	A	A
学校関係者評価委員による意見		子どもたちの興味や個性に向き合い、やりたいことを十分に取り組める環境が整えられ、指導、教育が行われていると思います。幼稚園教育が、『「遊び」を通して』行われていることを実感し、子どもたちの活動の見方が変わりました。今後も、幼児の成長につながる「遊び」を期待します。子どもたちが「大切にされている」と感じることは園・学校づくりにおいて、もっとも大切なことだと思います。これからも信頼される園づくりにご尽力ください。			
教育課程の実施と改善	経営の重点の具現化に向けて、教職員が協働しながら組織的に教育課程や園運営の改善に取り組んでいる。	B	幼児個々の良さや存在が尊重されることを念頭に置いて保育している。次年度は、さらに少人数での園運営となるため、業務や役割を精選し、教職員が組織的に協働して進められる体制、職場環境の改善にあたる。	A	A
	教師は、一人一人の良さや実態について共通理解を図り、必要な経験が得られるよう週案や学級経営の計画、実施改善に当たっている。	A	全教職員で幼児理解を深め、互いの経験や見識を持ち寄って具体的な手立てや必要な経験を見出してきた。次年度は、2学級での園生活になることを強みと捉え、幼児の豊かな育ちを保障する園生活づくりに努める。	A	A
	教師は園生活が多様で豊かになるよう環境を整え、幼児の実態に応じた保育・行事を組み立てている。	A	園生活や行事は、その都度感染症の状況に応じてできる方法を検討し、実施した。今後も、幼児期にふさわしい多様で豊かな体験が得られるよう、ねらいや幼児の育ちにつながる取組かという視点で柔軟に計画していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見		少人数になると今までできたことが同じようにできなくなるため、個々の園児の成長のため、より一層「園全体」での取組が求められると思います。少人数の良さを活かし、異年齢交流を図る機会が増えることで、子どもたちが多様な経験を積んでいくことを願います。一方で、子どもたちのためを考えすぎること教職員の負担感が大きくなりすぎないように期待します。組織的、計画的な園運営は大切ですが、すべてを完璧にというのは難しく、適宜修正しつつ運営していくことが重要と考えます。「教職員の元気＝子どもの元気」です。			

信頼される幼稚園・家庭・地域との連携と発信	園生活の様子や幼児期にふさわしい生活について、懇談会・便り・ホームページなどを通して家庭や地域に発信し、開かれた園作りに努めている。	A	園生活や子どもの育ちが具体で保護者に伝わるよう工夫、改善を図ってきた。次年度は参観を増やすとともに、便りやHpからの発信内容や発信方法の精査、工夫に努め、家庭や地域の園の取組への理解を深めていく。	A	A
	安全・安心な園生活に必要な環境づくりと改善に努め、家庭に必要な情報を提供し、連携しながら教育活動を行っている。	A	感染症対策はガイドライン等に沿って園の実情を踏まえた取組となるよう取り組んだ。今後も、迅速な対応と、家庭への丁寧な情報提供や協力依頼に努め、安全・安心な園生活を保障していく。	A	A
	保護者と子どもの成長の様子を共有し、子育ての支援となるよう対応している。	B	送迎時など保護者と対面で様子を伝え合う機会を有効に活用し、保護者がより安心して相談したり連携したりできるよう、園全体で子育てを支える体制と関係の構築に努める。	A	B
	幼児、児童に必要な経験が得られるよう、地域の小学校など教育・保育機関等と、連携・交流を推進している。	A	東苗穂小学校とは、前年度の評価を受け、園児、児童の交流や教師間の研究協議を進めることができた。一層子どもの育ちにつながる取組とするために具体策を講じていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見		園だよりやホームページを通して子どもたちの様子がよく分かります。園内部だけでなく、外部に向けての発信を行うためにはエネルギーの必要なことと思います。真摯にそれに向かおうとする姿勢は評価されるべきと考えます。保護者にとっては、年齢や個々に応じた育ちに向けた手立てや予定などの見通しがもてるよう、より正確で迅速な連絡や情報提供を期待します。様々な制約が緩和されつつあるので、保護者との連携、東苗穂小学校との子どもたちや職員との交流など地域とのつながりや力を活用して教育活動を進めていけるとよいと思います。			
研究実践園の取組	研究副主題「幼保小連携・接続のよりよい推進のために」の実現に向けて実践を重ね、幼児教育の重要性の発信に努めている。	B	本園の小学校との連携・接続の実践を通して研究副主題に向かって研究を進めている。次年度は、幼児期から小学校以降に育ちをつなげていくため、幼児期にふさわしい学びについて北区と協働で研究を深め、分かりやすく発信することを目指す。	A	A
	区幼保小連携推進協議会では、区内の幼児教育施設や小学校同士が必要な情報を共有し学び合えるよう運営している。	A	東区の現状を踏まえつつ、全市統一の方向性、内容で幼保小連携推進協議会を実施し、関係者で情報共有し学び合うことができた。子どもの育ちと学びをつなぐ実践の充実を目指し、関係する施設同士が必要感をもって、連携強化に当たることが必要である。	A	A
	「さっぽろっ子『学び』のススメ」や「ポロップひろば」を通して遊びや幼児の育ちの捉え方の情報を発信し、園内外の家庭の子育ての支援を進めている。	A	保護者向けリーフレット配付やポロップひろばの実施では、一方的発信や場の提供に留めず、保護者自身が子育ての安心感や手立てを見出せる取組を工夫する。同時に、園児や保育者の学びが得られる方法を探る。	A	A
	地域教育相談や幼稚園訪問支援、訪問研修では、ニーズに応じて子育ての支援や特別支援教育の情報提供を行っている。	A	幼児教育支援員は、地域教育相談利用者や幼児教育施設の協力を得ながら、ニーズや実情に応じた相談や支援に努めている。今年度から開始した訪問研修では、幼児教育施設とともに保育の質向上を図っていけるよう、研究実践園としてさらに研さんが必要である。	B	B
学校関係者評価委員による意見		「小学校との連携」「幼保連携」がしっかりした形になることは十数年前には考えられなかった取組です。今後、「幼保小連携」の中身がさらに充実していくことを願っています。様々な情報発信、交流を積極的に行うことで更なる保育の質の向上を願います。家庭や外部への発信では、地道な実践の積み重ねを期待します。閉園に向けた業務の縮小やコロナ禍での成約がある中、園のできる限りのことをしていく姿勢を支持します。地域教育相談、幼児教育施設の訪問研修では、利用する保護者や園のニーズに応じてさらに利用しやすくなること願います。教育活動と並行した研究実践園の取組は大変と思いますが、今後も工夫して推進してください。			